

グループ空清「天守物語」

和室で上演されたグループ空清の泉鏡花「天守物語」は、限られた空間を余すところなく活用した美しい公演であった。

まずよく考えられた舞台美術が印象的であった。四角い畳と畳の上の二つの手毬。畳の右側には紺色の台の上の生花。奥には赤い二本の柱と黒の屏風。赤、緑、紺、黒と、色彩のバランスが良い。鏡花の戯曲にも数多くの色彩の言葉が登場するが、その色彩感覚豊かな戯曲の言葉の視覚化に成功していた。

これら美術は戯曲の登場人物の象徴としても機能する。実際に演者とわかりやすく絡む舞台美術は獅子頭に見立てられた生花だけだったが、その他の美術も場面に応じて登場人物の見立てとしても見る事ができた。例えば生花は獅子頭が登場していない場面では、花のように美しい天守夫人の象徴のようにも見え、劇終盤で明かされる獅子と天守夫人の関係性を暗示しているようにも感じられる。二つの手毬や赤い二本の柱は天守夫人と亀姫にも見える。観客の想像力を掻き立てる、よく工夫された美術であった。

今回は朗読形式の一人芝居ということで、複数の役の演じ分けも見所の一つだったが、見事に演じきっていた。例えば劇前半の舌長姥と天守夫人、亀姫が会話をする場面では声の高さで丁寧に三人の年齢の差を表現した。性別が同じ役柄の演じ分けは容易いことではないだろう。その努力に脱帽する。他にも立ち方、視線の投げ方、手の動かし方等にも演者の細心の気配りがわかり、見ていて飽きることが無かった。

全体的に、優雅で耽美な「泉鏡花」の劇世界を象徴的に提示することに成功しており、よく作り込まれた丁寧な舞台であった。それゆえに一点、違和感を感じた場面があった。

劇後半、図書を追う九平が「それ、面々」と他の追っ手たちを図書にけしかける場面で、観客の方の照明が点いた場面である。そのことによって、それまでは象徴舞台と丁寧な演技で構築された劇世界に空想で関わる楽しみ方をしていたにもかかわらず、身体を晒して直接的に関わることを求められたように感じた。身体と舞台美術が同列に扱われることになり、それゆえ違和感を持ったのである。観客を「追っ手たち」に見立てた意図はわかったのだが、空想で関わればいいのか、身体で関わればいいのか、やや混同する結果となった。

劇の種類によっては、その混同が異化効果を出し、劇世界全体の見え方を変える働きをすることもあるだろう。しかし、今回は最終的にその混同が劇全体の中で意味を持つことは無かったように思う。観客席を利用した演出を試みるならば、劇世界とのバランスを再考する必要があるのではないだろうか。

しかし、全体的に丁寧に構成された魅力的な舞台であった。次回もぜひ素敵な劇世界を生み出してほしい。(担当：岡田露子 大阪大学大学院演劇学研究室)